自動思考機能性評価目録の開発および信頼性・妥当性の検討

○田巻秀樹¹・田中恒彦²

(¹札幌少年鑑別所・²新潟大学人文・教育学系)

キーワード: 自動思考, 機能性, 評価目録

Reliability and Validity of Functionality of Automatic Thoughts Inventory

Hideki TAMAKI¹, and Tsuchiko Tanaka²

(¹Sapporo juvenile classification home, ²Niigata University)

Key Words: Automatic Thoughts, Functionality, Inventory

目 的

本研究では「浮かび上がってきた自動思考を選択することによるメリットが大きな場合には選択し、デメリットが大きな場合には距離を置くことができる状態」を「自動思考が機能的に働いている状態（自動思考の機能性が高い状態）」と操作的に定義する。「自動思考の機能性」を評価できる指標がないため、「自動思考機能性評価目録」を開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方 法

自動思考の構成概念として、Beck et al. (1979) の自動思考の定義に加えて、情報処理理論における自動性の定義(Bargh, 1994; 北村, 2002) も参考にし、「機能的に働いていること」について、①繰り返し考え込むことなく浮かんだ自動思考を受け流していること、②自動思考へのメタ認知がしっかり働いていること、③自動思考が浮かんだ際に考えを切り替えることができること、という観点から予備調査を行った。その後、学生 19 名に予備尺度に回答してもらい、内容の項目に修正を加え、30 項目の原案を作成した。

本研究では、COSMIN チェックリストの基準(Terwee et al, 2012) を参考に、例数設計、分析を行った。通学などの日常生活に支障をきたす精神疾患のない健常な大学生 211 名（男性 80 名、女性 131 名、平均年齢 19.94 歳、 $SD=1.23$ ）を分析対象とした。再検査信頼性の検討では、そのうち 1 回目と 2 回目の回答に不備のなかった大学生 100 名（男性 36 名、女性 64 名、平均年齢 19.83 歳、 $SD=1.42$ ）を分析対象とした。

調査は新潟大学心理学系研究倫理審査委員会による承認を得た上で実施された（倫理申請番号：2017-005）。調査時期は 2017 年 7 月から 2017 年 11 月であった。講義担当教員に了承を得た上で、講義終了後に質問紙を配布し、回収した。また、縁故法を用いた質問紙配布も行った。再検査の調査状況は以下の通りであった。調査の時間間隔は 1 週間から 2 週間程度であり、調査場所や教示方法は測定時点間で類似していた。

フェイスシート（学年・年齢・性別）、学籍番号または携帯番号下 4 桁の回答を求めた。尺度は以下のものを使用した。再検査では以下の尺度のうち（a）のみを用いた。

（a）自動思考機能性評価目録の原案。計 30 項目。4 件法。

（b）日本語版 AT Q-R 短縮版（坂本ら, 2004）。「否定的自動思考」6 項目、「肯定的自動思考」6 項目、計 12 項目。5 件法。

（c）日本語版 RRQ（高野・丹野, 2008）。「反すう」12 項目、「省察」12 項目、計 24 項目。5 件法。

（d）日本語版 CFI（徳吉・岩崎, 2012）。「代替」10 項目、「統制（不能）」6 項目、計 16 項目。7 件法。

（e）CFQ13 項目版（嶋ら, 2016）。「認知的フュージョン」9 項目と「脱フュージョン」4 項目の計 13 項目。7 件法。

結 果

自動思考機能性評価目録について最尤法・プロマックス回転の探索的因子分析を行った。最終的に第 1 因子 8 項目、第 2 因子 6 項目、第 3 因子 3 項目の計 17 項目が抽出された。また、抽出されたモデルで最尤法の確認的因子分析を行ったところ、全てのパス係数と共分散が有意であり（ $\beta_s=.42\sim.78$, $ps<.001$ ）、適合度は許容できる範囲を示した。第 1 因子を「反すう制御」、第 2 因子を「メタ認知的気づき」、第 3 因子を「思考からの解放」と命名した。再検査信頼性を検討するために 100 名を分析対象として一致性の級内相関係数（ $ICC_{agreement}$ ）を算出した。その後、測定誤差（ $SEM_{agreement}$ ）と検出可能な最小変化（ $SDC_{agreement}$ ）を算出した。また、内的整合性を検討するために、211 名を対象に Cronbach の α 係数を算出した。

考 察

それぞれの下位尺度が自動思考の内容にとらわれることなく、MCT や第三世代の行動療法（e.g., Hayes et al., 2012）と情報処理理論の自動性（Bargh, 1994; 北村, 2002）の両方の側面から自動思考の機能性を評価できる指標となったと考えられる。一方で、「思考からの解放」については、他の下位尺度との相関が小さかったため、慎重な解釈が必要である。

また、自動思考機能性評価目録は、COSMIN チェックリスト（Terwee et al., 2012）の基準に従って作成されており、信頼性と妥当性が高い評価指標となったのも特徴といえる。

さらに、作成した評価指標は翻訳版ではなく、本邦独自に作成された評価指標であることも意義があると考えられる。

本研究では健常な学生を対象としているため、臨床的妥当性や一般化可能性について検討できていないことに関しては今後の課題である。